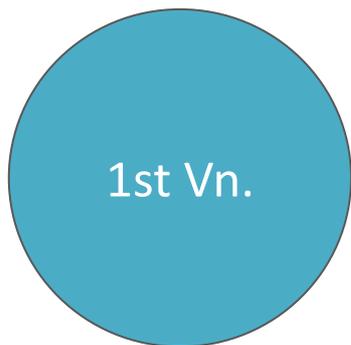


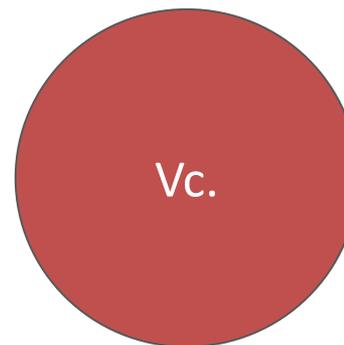
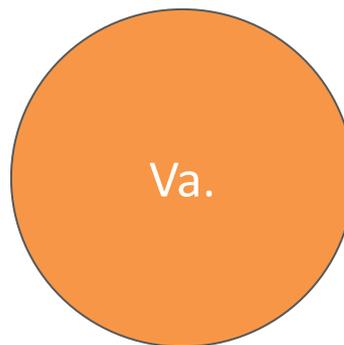
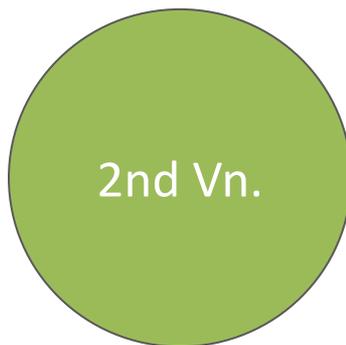
2-4 フォーム2:ホモフォニー型

ホモフォニー型

1stはメロディ



それ以外は伴奏



ホモフォニー型の特徴

- ① 1stがメロディ、それ以外が伴奏
- ② 古典派音楽でよく用いられたアレンジスタイル
- ③ メロディ、和音、ベース、リズムの全てをストリングスだけでまかなえるため、カルテットや弦楽合奏にも向いている
- ④ 逆に、コード楽器やベース楽器が多数存在する編成ではあまり向かない

C
unis.

Vln. I *p*

Vln. II *p* *mp*

Vla. *p* *mp*

Vc. *p*

17 18 19 20 21 22 23 24

×口 **D**

Vln. I *f*

Vln. II *mf*

Vla. *mf*

Vc. *mf*

25 26 27 28 29 30 31 32

伴奏

ホモフォニー型のアレンジのポイント

ホモフォニー型は、ストリングス単体で「メロディ」「コード」「ベースライン」「リズム」すべての要素を演奏することが可能なため、他の楽器との組み合わせなしでも十分アレンジを成立させることができる。

したがって、無理にほかの楽器と組み合わせる必要はなく、仮に組み合わせるとしても、ストリングスパートを補強する形で足すのが良い。

■ ホモフォニー型アレンジの楽器組み合わせ例

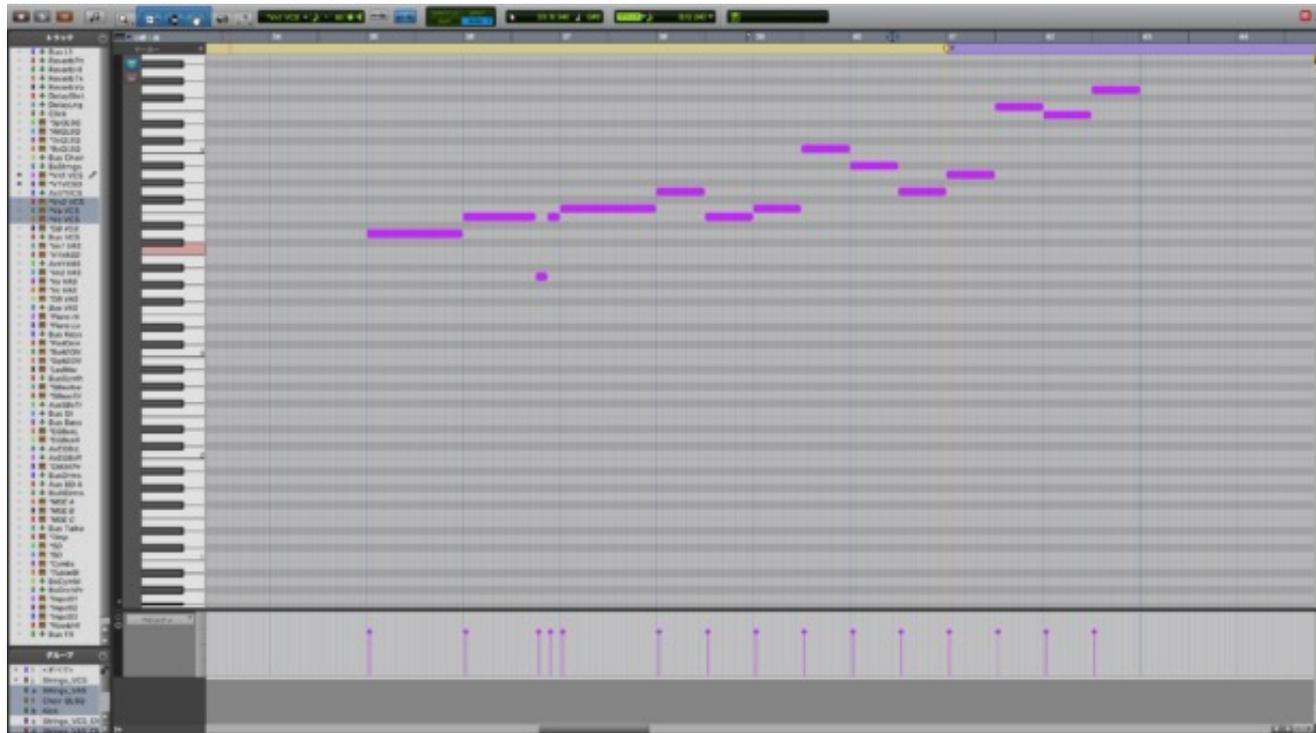
- ✓ メロディ → 1st Violin
- ✓ コード → ストリングス下三声、コード楽器を入れる場合は軽めに
- ✓ ベース → Cello、Contrabass、その他補強程度
- ✓ リズム → ストリングス下三声刻み、パーカッションなど

ホモフォニー型のアレンジ手順

- ① メロディを1st Violinで打ち込む
- ② ベース(各コードのルート)をCelloで打ち込む
- ③ 2nd、Violaを使ってコードを補完する
- ④ 必要に応じて内声に動きをつける

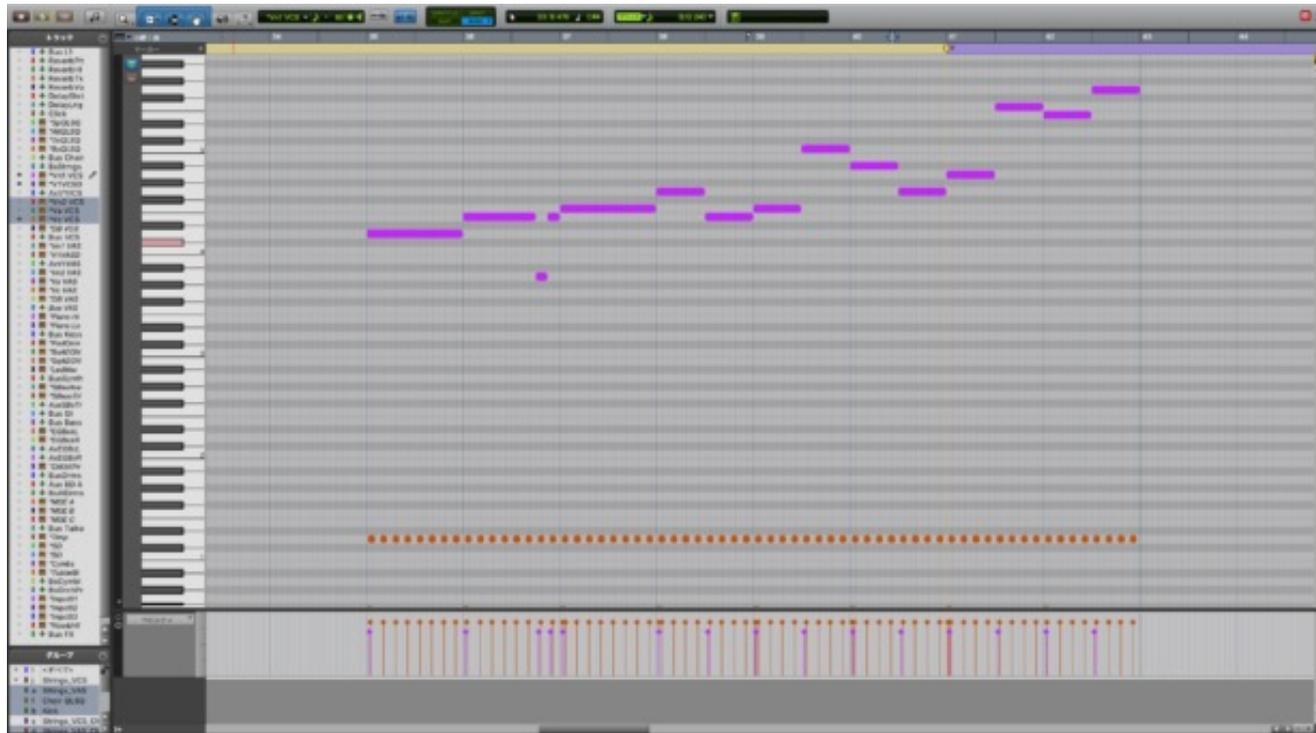
① 1st Violinで打ち込む

主旋律を1st Violinに打ち込んでいく。ユニゾン型と違い、2nd以下とユニゾンさせることもないため、Violin本来の音域内に収まっていればOK、



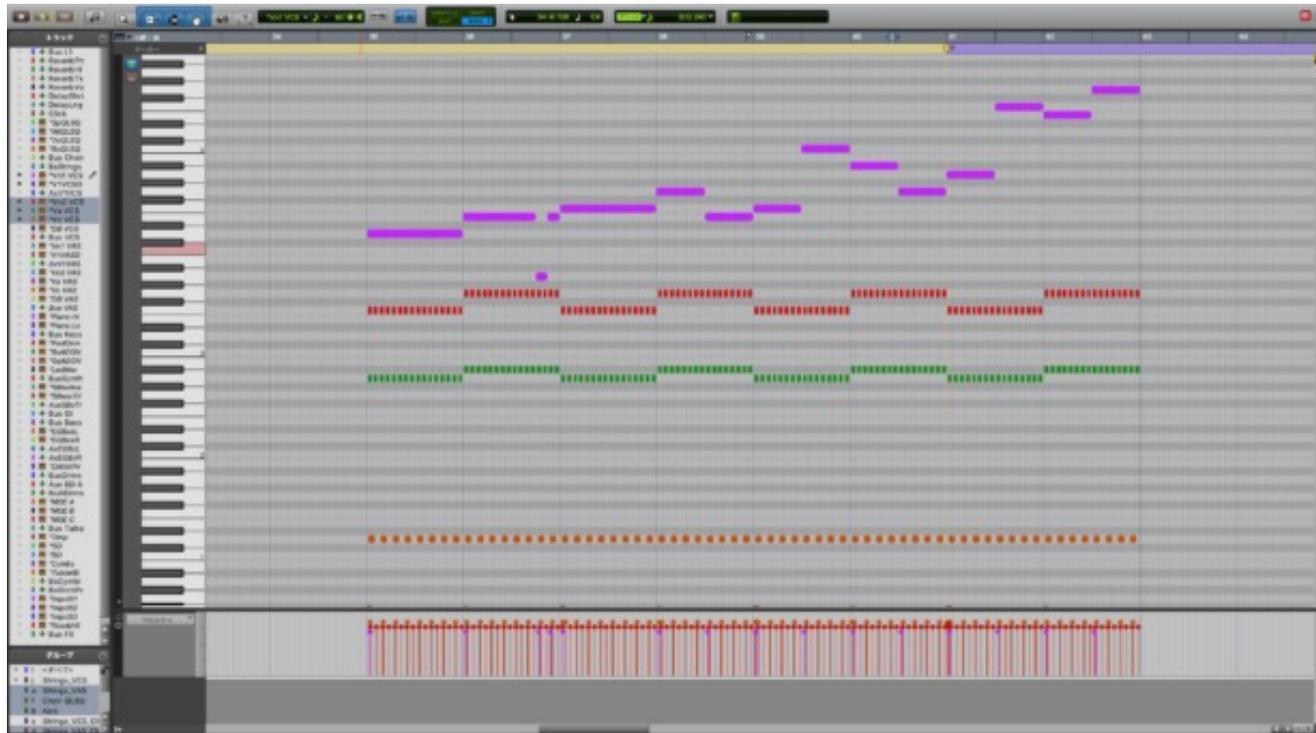
② ベース(各コードのルート)をCelloで打ち込む

各コードのルート(分数コードの場合は分母の音)をCelloで打ち込んでいく。この時、何かしらリズム要素をプラスした方がサマになる。



③ 2nd、Violaを使ってコードを補完する

和声学のルールに従ってコードトーンを配置。可能な限り下三声のみでコードが成立するように配置すると安心。ベース同様、リズム要素を取り入れるとなおよし。



④ 必要に応じて内声に動きをつける

内声に動きを出すことで単調さが回避でき、かつ、声部同士の不必要な乖離や禁則を自然に避けることができる。

